



天 眼 鏡

日下太朗

新年明けましておめでとうございませす。

新政権は、ハネムーンと言われた時期が終わり、従前からの多くの慣行や仕組みを変えるため、まだまだ試行錯誤の中にあります。官僚依存から脱することは簡単ではないということもところどころで現れており、これが軌道に乗るか否かは新しい年にかかっていると思われています。特に、本年七月執行の参議院議員選挙前には、国民の皆さんにしっかりと内容を表現できる政治が求められると考えます。それだけに、緊張感を持った政治・政策の道

筋を、より一層の説得力と透明性をもって、強力に進めていかなければならぬと考えます。

私は、小さな町で地方紙の経営をしています。私が、昨年の八月三〇日以降、時の政権の特色がしばしば紙面に現れるようになっていきます。例えば、従来は自治体の示す政策は中央政府の縛りが自然と影響していたのか、この自治体も比較的画一的であり、必然的に地方紙の記事もこれまた同じような内容でしたが、最近は少子高齢化の問題や貧困、人権、環境といったテーマの記事が多くなってきたように感じます。

さて、表題の「天眼鏡」。広辞林によると、「肉眼を超越して自在に物事を見抜く眼」とか「神通力のある眼」と説明されています。しかし、ここにいう天眼鏡とは「虫めがね」のことです。わが地方紙には読者の雑感を記す項がありますが、ここに元教員の方が、天眼鏡と自身のメガネを通して、子どもの頃の思い出や世相を書いた文章を掲載しています。

私自身、虫めがねは子どもの頃の大切な遊びの必需品でした。いつもポケットにしるばせ、昆虫を捕まえては、友だちにも「見れ！見れ！」と巻き込み、拡大された昆虫の顔や体を正面から、そして上から覗き込み、そのあまりの凄まじい形相にびつくりしたものです。後年、円谷英二監督がモスラやゴジラといった怪獣を映画に登場させたとき、昆虫や爬虫類が放射能や化学薬品などにより異常成長したという設定に納得しえたのは、子どもの頃に虫めがねの向こうに見えた蛾やトカゲの形相を想起したからでしょう。「モス（蛾の英



名)「ラ」は、これ以後に製作された新怪獣のネーミングの元祖となり、語尾に「ラ」をぶら下げた怪獣が多く登場しました。私たちの年代にとって、虫めがねは、今のものと違って粗末だったと思いますが、外で遊ぶとき、家で遊ぶとき、それぞれに想像力を加えて、大いに満足感を与える遊びの必需品だったわけです。

大人になるにつれ、虫めがねは私の生活から消えていきましたが、三年前の五月、岳父が亡くなり、岳父の家中を片付けていると、趣味で集めていたのか、その時々が必要に応じて買いたのか、形も大きさも厚みも様々なくつもの天眼鏡が出てきました。

天眼鏡、すなわち虫めがねは、私をして先に記したことを思い出させ、また、わが地方紙の投稿項に記された内容と思いを同じくさせました。

再び虫めがねが身近に感じられる齢となり、今は岳父の遺した虫めがねのいくつかを拡大鏡として時々使っています。新聞や雑誌の類は、ただしも、契約書やパンフレット類、商品の説明書などは本当に字が小さく、読むには拡大鏡が必要です。また、法文を読む場合も同様で、法的な適用事項や行間に注釈の記号や※印が示され、脚注や欄外にそれとなく必要な説明や注意点が小さな字で書かれています。肩に力を入れながら解読する様は、齢を感じるには言いながらも、もつと他に工夫がないのか、高齢者や弱者に優しい販売の哲学はないのかと問わずにはいられません。虫めがねで世相や文章を理解できるうちはいいのかもしれないが、わかりたくてもわからない世であってはなりません。

最後に、わが地元過疎の町から。故

筑紫哲也さんが語った以下のようなメッセージを読んだことがあります。「過疎って、田舎にポツンと少人数が住んでいるってことでしょう。もう誰も住まなくなる、誰もいなくなるんだから、過疎という状況はなくなるわけです。消えるんです」。私の町は森林地帯ですが、特に荒れ方が凄まじいのが山元の町です。他の自治体では、市町村合併がそれにいつそうのアクセルを踏んでいます。筑紫さんは「このままでは、日本の国土は荒野が多くなり、人と人の関係さえ希薄になる可能性もあり、国の大部分が荒野となる恐れもあるのではないか」とも語っていました。

本年は、日本が近隣諸国との関係を良くすることも必要ですし、この国がどこに行こうとしているのか、国民に方向をしっかりと示す年になってほしいと思います。地方が滅茶苦茶になって栄えた国はないとの思いを強く持ち、がんばりたいとの気持ちを新たにしています。

へくさか たろう・北海道議会議員